

【論文】

学校の博物館利用における学習活動の評価：  
小学校6年間を振り返るアンケート調査から、博学連携を追究して

Evaluating learning experience in museum at school time:  
By means of the survey what the students learned in museum for six years

西尾 円<sup>※</sup>

Madoka NISHIO

**Abstract:**

Many museums try to meet the request of school teachers “we want to make our students to study in museum”. Sometimes there are some criticisms to the aim of this relationship.

In this article I want to make clearly the value of learning experience in museum at school time. Then the three points of view are set: the first point of view is named “viewpoint A”, this evaluates knowledge of studying in museum. The second point of view is named “viewpoint B” to evaluate what the students learn from “the museum”. And the third point of view is named “viewpoint C” to evaluate what this experience influence on their action, way of thinking and their life. By using these points of view, I consider the survey of Minokamo City Museum. From this survey, in museum children study three main point and the museum realizes that the learning activity originally comes from the museum’s mission.

1. はじめに

2002年度の「総合的な学習の時間」の完全実施を皮切りに、学校では博物館を利用した授業の展開について、博物館でも学校と協力して授業を行う「連携」や「融合」への取り組みのための教材開発等についての研究が活発になってきた。同時に、「博物館と学校の連携」、「博物館と学校の融合」の機運が高まり、様々な事例が紹介されるなかで、「連携」や「融合」のあり方や目的が問われてきた。「学校との連携を強調するあまりに学校の教育制度や教育課程に寄り添いす

---

※ 美濃加茂市民ミュージアム 学習係

---

ぎると美術館自体が存在意義を見失うことになる。学校化した美術館は文化装置としての意味も人々の自己教育と相互教育を支援する機能も見失われる。」(廣瀬隆人 2006 pp.3) ののである。また、こんにち「総合的な学習の時間」の是非が問われる中で、学校が博物館を利用して行う学習活動はどのような成果があったのか、あるいはなかったのか、その中で博物館は「美術館を支える人づくりという視点で学校と連携してきたのか」(廣瀬隆人 2006 pp.3) という点を再考する必要があると考える。

そこで本稿ではまず、学校が博物館を利用して行う学習活動を評価するための3つの視点を提案する。次に、実際に行ったアンケート調査をこの3つの視点をもとに分析し、この学習活動を通じて子どもはどのようなことを学んだのかを明らかにする。そして学校と博物館が協力して学習を作り上げていく上で見直すことを明らかにし、「博物館と学校の連携」を目指す学習活動の実現につなげていきたいと考える。

## 2. 課題の所在

### (1) 先行研究の検討

博物館における学校利用、授業についての事例は数多い。しかし、「博物館と学校の連携」や「融合」に着眼し、博物館機能を活かした学習活動の評価に関する研究、またその中での子どもの学びの成果を明らかにする研究は、博物館学研究、教育学研究2つの分野において管見の限り少ない。その中でも特に注目すべき研究として以下の4点がある。

井上(2006)は、歴史系博物館における子どもの学びを評価するために「事前調査・事後調査」の有効性を提示している。『『学びの評価』は、学習到達度を測るための評価とは異なり、子どもが『歴史系博物館をどのように捉え、理解したのか』(博物館像・博物館のイメージ)、『歴史系博物館で学ぶことの意欲』、『歴史学習への興味・関心』の3点を把握すること』(井上由佳 2006 pp.78)が必要と述べている。この事前事後の調査により、博物館の来館前後における博物館へのイメージの変化や歴史学習への関心の変化を捉えている。また、「博物館を訪問する前の子どもの理解度や興味・関心から出発する展示や教育プログラムを開発し提供していくことが博物館には求められている」(井上由佳 2006 pp.80)として、この事前調査・事後調査から、博物館への要望や期待を明らかにした。しかし、1回限りの博物館での学習体験の調査であるため、その後の変化を追及できないと言える。

次に、湯浅(2003)による博物館活動の長期的な影響力を評価する視点に関する研究がある。この中で湯浅は、「博物館活動の『質』を評価する際の重要な指標として、博物館体験が人に与える影響力に注目し、活動の意義を社会に問う評価」(湯浅万紀子 2003 pp.7)のあり方が必要であると指摘している。そこで、博物館での学習体験の1つである展示を評価するための視点として以下の4点を挙げている(湯浅万紀子 2003 pp.8)。

- ①いかに来館者のものの見方・考え方に影響を与えるか。
- ②コミュニケーションを契機として来館者が自分自身で課題を発見し、疑問や関心を膨らませ

---

るようになったのか。

③常の思考方法に変化が現れたのか。

④想像力が刺激されて、それぞれの活動分野での想像に寄与するまでに影響力が及んだのか。

これらは展示の評価から博物館での学習活動全体へ広がる視点であるが、湯浅も指摘するように「来館直後の理解や感動がそのまま保持されるとは限らない。影響力を評価するには、継続した調査、あるいは長期間を経た調査が必要であることは明白」（湯浅万紀子 2003 pp.10）と言える。湯浅はここで、サイエンス友の会会員という博物館にもっとも近い人々への長期的影響力について調査している。博物館と深い関わりを持った人が親になった場合、その子どもも再び博物館と関わりを持つことが多いということが分かった。しかし、ここで課題となるのは、元来関心の高い人々への調査であるという点ではないだろうか。

3番目に竹内（2006）の研究を取り上げる。竹内は「包括的学習成果」というイギリスの評価基準を使用したアンケート評価を試みている。この中で博物館における子どもの学習の影響や効果として「①知識と理解、②技術、③姿勢と価値観、④楽しさ・触発・創造力、⑤行動・態度・進歩」の5つのカテゴリーにより、児童・生徒の意見の中に見られる表現を分析する。しかしここで課題となるのは、自分の意見や気持ちを文章としての確に表現する力をすべての児童・生徒が身に付けているとはいえないこと、そしてこの5つのカテゴリーで評価することができるのかという点であると考えられる。竹内も指摘しているが、『学習効果』という表現では捉えきれない、もっと広い意味での博物館が与えた影響や効果について明らかにしていくことが必要」（竹内有理 2006 pp.29）である。

松岡（2006）は、デューイの理論をもとに歴史展示における主体的な学び評価する視点として、「①構成主義学習理論に基づく歴史概念の獲得、②多重知能の理論と批判的思考力に基づく認知・思考力スキル、③文化の多元性に基づく社会性の獲得を目指す社会的スキル」の3点を挙げている（松岡葉月 2006 pp.70）。そして、学びの評価はいかなる目的や年代の来館者の利用形態にも適用できる観点である必要性を説き、博物館へのすべての来館者の学びを評価する視点として提示している。すなわち有目的かどうかという利用形態や、博物館の中で具体的な体験をすることかどうかといったことにより類型化し評価することができるというのである。これまで取り上げてきた3氏の評価の視点は、いずれも学びの対象が子どもであったが、松岡はその評価対象として大人の影響を含めて考えている。そして、あらゆる学びを対象としている。つまり、学校の授業時間内での学びと休日など家族との来館時における学びは同質ではない。学びに具体的な到達目標が設定されているかどうか、学ぶ主体が同年齢であるかどうか、一斉に学ぶのかどうかなどの点である。特に学校での学びは、学習指導要領に明確な目標が掲げられ、意図的に仕組まれているが、博物館での学びには偶発的な場合が多い。この差も含めて評価できる視点を設定した松岡の評価は着目する意味がある。

## (2) 課題の設定

以上、4氏に共通する点は、行政的な評価や顧客満足度評価などに見られるような数量的数値的な評価ではなく、学びによって得られた「質」を評価する研究となっている点である。博物館の展示あるいは学習活動を通じて「何を学んだのか。」「学習の前後でどのような変化が表れたのか。」といったことに着目している。すなわち「教育的な評価」と呼べる。

ところで、教育学の分野で「教育評価」と言う場合、それは「あくまでも、教育活動と直接的な関連を持つもの」(梶田叡一 2002 pp.1-2)である。「教育評価」は、学習の最終段階では教育目標に対して学習者はどの程度成長・発達したのかということを明らかにするために、学習の中間段階では個々人の成長に必要とされる観点を見つけ出し、その成長に向けた改善策を検討・実施するために行われる。ここで強調したい点は、「教育評価」が明確な教育目標という尺度を持ち、「子どもの成長の姿」や「次の課題提示や指導方法」につながる、積極的な改善のための評価の仕方をするという点である。そのため、評価の対象は学習者個々人のみならず、教育活動や教育内容(カリキュラム)、教師(教育指導者)、学校などの基本的な施設などあらゆる学校教育に関わるものが含まれてくるのである。

学校が博物館を利用して行う学びにおいても、同じように教育的な視点で評価を行う必要があると考え、以下の点に注目する。1つ目に、学校が博物館機能を利用して行う学習活動は「学校教育の教育課程上に位置づいた学習活動である」という点である。そして2つ目は、学校教育とは異なる目的を持つ「博物館という社会教育機関での学習活動」であるという点である。3つ目は、子どもが社会に対してどのような働きかけや行動を行うのかということに着目する。

さらに、これらに着眼して実施したアンケートを分析することで、「博物館と学校の連携」を目指すこの学習活動について、子どもたちが学んだことや博物館での学習活動を振り返る手がかりを示すことができると考える。

## 3. 調査方法と評価の分析の視点

### (1) アンケート(質問紙)による調査の妥当性

学校教育において子どもの現状の姿や成長の実態などを把握し調査する方法としては様々な方法があるが、主なものに以下の方法がある(梶田叡一 2002 pp.159-161)。個々の子どもの水準を知るための「標準テスト」や学習の目標やねらいを自作の問題により確認できる「教師の作成によるテスト」、子ども自身が自己を振り返り答える「質問紙(自己評価表を含む)」、直接対面しながら口頭で答える「面接による評価(問答法)」、様々な活動に取り組んでいる場での「観察記録による評価」、与えられた課題についてあらかじめ定めた基準をもとに判断する「レポート・作文等による評価」、教科の時間などの中で製作や実演について教師が準備した基準などにより照らし合わせ判断する「製作物や実演による評価」である。これらの方法はふさわしい発達段階や目的に基づき選択される。例えば、教師が学習の前段階での子どもの実態や関心を知るための「事前的評価」や学習の成果や目標への到達度を知るために、「標準テスト」や「教師の作

---

成によるテスト」があることは、誰もが経験上知っている。

では、学校が博物館を利用して行った学習活動での学びを評価する際にはどのような方法が最もふさわしいのであろうか。学校であれば常に子どもがいるため、観察や製作物等により直接子どもを見ながらの評価を行うことができるが、博物館では常に子どもが滞在している訳ではない。また、博物館での学習はそこだけで完結する内容ではなく、博物館に来館する前後の学習や社会的経験ともつながりを持っているはずである。授業としての来館での学習だけではなく、家庭に帰ってからの生活（親、きょうだいとの会話や家庭にある書物を読む等）や別の教育機関での学習に発展する可能性もある。そして、博物館に来館したできるだけ多くの成長課題や家庭背景を持つ子どもについての評価を子ども自身の言葉などから得たいと考える。

これらの内容をすべて網羅できる方法としては「質問紙（自己評価表も含む）」、すなわち「アンケート調査」による方法が最も妥当であると考えられる。この方法によると、学校を通じて多様な家庭背景や興味関心を持つ子どもへ調査の協力依頼ができる。この博物館での学びの評価を通じて、最も知りたい学習者自身の変化については、「教師の目からの評価、外部の視点からの評価がどうしても困難な『関心・意欲・態度』や『情意領域』といった内面に関わる達成や成長については、結局学習者1人ひとりが自分自身で点検し、吟味してみるのが一番よい」（梶田叡一 2002 pp.183、傍点引用者）からである。しかし、この評価方法には、調査者が得たいものを得るだけでなく、被調査者にも教育的な意味が含まれているとし、梶田はそれを「本質的な意味での可能性」と呼び、「自分自身の振り返りの機会の提供」、「客観的な自己認識の成立」、「自分の分析的な吟味と問題点の明確化」、「自己感情の喚起と深化」、「次のステップへの決意と意欲」の5つの点を挙げている（梶田叡一 2002 pp.184-187）。質問紙式のアンケート調査により、子どもは自己の学習過程における博物館との関わりを確認することができ、博物館での経験を再認識することに役立つと考える。

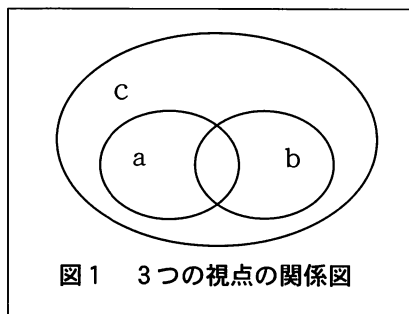
## （2）設定した視点の実際

学校が博物館機能を利用して行う学習活動の場合には、この博物館と学校との2つ機関における学びのねらいを、どのくらい達成できたのかについて検討する必要があるのではないだろうか。博物館で行った授業とはいえ、教育課程上での学習であるのだからそのねらいの達成は学校側による評価で十分であるとする意見もあるかもしれない。しかし博物館として、学芸員やエデュケーターが示した「博物館資料」やそれに関連する施設や場所などから、興味関心もばらばらな成長の発達段階にある子どもはどのような印象を受け、そのものが持つ「力」をどのように感じたのかを知る必要がある。

そこで、学校が博物館を利用した学習における子どもの学習を評価するための3つの視点を設定した。1つ目は、学校の教育課程に位置付けた学習を評価するという視点aである。視点aはキーワードを「知識・技術」とし、「新しい発見や気づき、自己実現がある。教科学習等への反映」とした。博物館での学習活動により得られた教科の中での新しい発見や気づき、子ども自身がいたと感じる力など学校教育の中で求められるねらいを表す「知識や技術」のことを指す。2つ

目には博物館として子どもに知らせたい、伝えたい事柄に関する学習を評価するという視点bである。視点bは、キーワードを「心・感性」とし、特に「博物館の『もの・ひと・こと・場』への思い」とした。博物館での学習活動を通じて子どもが経験したことや話を聞いたことから自身で考えたり感じたりしたことを指している。さらに、博物館にある展示や実物資料はもちろん、博物館に関わる学芸員やボランティア、博物館を取り巻く敷地環境や設備などを含めて考える。最後にこの2つを内包する社会への広がりという見方の視点cである。子どもの生活は学校だけでなく家庭や地域の中でも営まれていて、社会の一員として活動をしている。その行動は学校での経験・博物館での経験が影響を与えることが考えられる。そのように社会の一員として子どもを捉えた場合の視点である。視点cは、キーワードを「行動の広がり・発展」とし、「他の博物館や社会・生活との関わりを積極的に持とうとすること」とした。

同時に、やや大雑把な議論であるが、このキーワードはそれぞれの教育活動の場も表しているとした。学校の範囲を「a」、博物館の範囲を「b」、学校と博物館が含まれる地域社会の範囲を全体集合「c」とし、このようなキーワードを元にベン図を作成した(図1)。子どもは徐々に「a」と「b」から「c」の範囲へ行動を拡大していくものと考えられる。「a」と「b」の重なり「 $a \cap b$ 」は、学校と博物館が協力しながら子どもの学習活動を行える範囲を示している。学校、博物館独自の教育活動は、それぞれの範囲から「 $a \cap b$ 」の範囲を除いた部分として表される。



3つの視点について実際のアンケートの記述を例に挙げると以下のようになる。ここでは小学6年生の理科「大地のつくりと変化」に関わる記述を、2006年度に実施したアンケートより抜粋した。

「a」：大地のつくりには、水のはたらきと火山のはたらきがあることが分かった。

「b」：スタッフの人が分かりやすく化石のことや化石林公園<sup>1</sup>のことを教えてくれたし、レプリカ作りも楽しかった。(加茂野小)

「 $a \cap b$ 」：火山でできた地層とか水でできた地層(はたらき)とかは、教科書でしか見たことがなかったので、本物を見た時はびっくりした。(加茂野小)

「c」：「大地のつくりと変化」の学習で行った時、たくさんの石を見ました。それから、岐阜県博物館に行ってもっといろいろな石を見ました。(古井小)

#### 4. 学習プログラムとアンケートの実際と視点の関連

##### (1) 文化の森における学習活動とプログラム

みのかも文化の森／美濃加茂市民ミュージアム(以下、文化の森と略す)は、「森の学校」を理念の1つに掲げ、主として小中学校の子どもたちの授業時間内における博物館での学習活動を支援

している<sup>2</sup>。博物館「文化の森」にある「もの・ひと・こと・場」を活かしながら、社会科見学のような一過性の活動に終わらない学習、すなわち学校の教育課程に位置づいていること、教師と文化の森のスタッフが共に作り上げる授業にすることを大切にしている。そのために、授業を行う前に、授業の場である文化の森で教師と打ち合わせを行い、ねらいや教師のねがい、事前の学習内容や子どもたちの関心を確認・共有し、教科や単元を確認し、「学習活動案」という形の指導案を作成している。そして、美濃加茂市の小学校に通う子どもは年に1回は必ず文化の森での学習活動を行うことができるよう、年間計画をたてている。また年3回行う文化の森活用委員会では、それぞれの学校で異なる学習活動プログラムの交流や反省、それらを踏まえた新プランの検討や、文化の森の資料を見学する活動を行い、学習の幅を広げることができるようにしている。学習活動の際には、主となる授業者は教師であり、学芸員や学校活用担当の学習係、学習支援ボランティアはそれぞれチームティ칭で関わりを持つ。

文化の森では多岐にわたる学習プログラムの原案を用意している。例えば、1年時には生活科の時間で「文化の森たんけん」と称した見学や国語「たぬきの糸車」の朗読や物語に出てくる「板戸」や「障子」などの情景を見て学ぶプログラム、3年時には理科の時間の「チョウを育てよう」の単元で、市内で見ることのできるチョウについて標本を観察しながら学芸員の話聞くプログラム、5年時には伸ばして板状にした粘土を使った皿作りの図工「ねじってまげて」のプログラムなどもある。

#### 代表的な小学校学習活動のプログラム

学年	教科	単元名	主な内容
1年	国語	たぬきの糸車	養蚕民家を復元した「生活体験館（まゆの家）」での朗読を聴く。
	生活科	いってみようやってみよう	文化の森の展示室や敷地内を見学したり、ピングゲームをして親しむ。
2年	図工	どんでんできるよ	敷地内の森の中で、木の枝、葉、竹など森の素材を使って家や町などを作る。
	生活科	秋とあそぼう	木の実や枝などを使い、おもちゃやかざりなどを作る。
3年	理科	チョウのからだ	美濃加茂に生息するチョウの話や学芸員から聞き、標本を使ったチョウの観察を行う。
	社会	わたしたちのまち みんなのまち	市内を眺めることのできるタワーから、市の様子を観察する。
4年	社会	古い道具と昔の暮らし	生活体験館で昔の道具を体験したり、話を聞く。
	社会	くらしを守る 消火設備	公共施設としての博物館にある防火設備や作品を守る展示室の設備／工夫について話を聞く。
5年	理科	流れる水のはたらき	市内を流れる川の上流と下流を見学、展示室にある岩石の形の変化のコーナーをあわせて見学。
	総合	福祉について	公共施設としての博物館でのバリアフリーの取り組みについて話を聞く。
6年	社会	今に続く室町文化	生活体験館での生け花や茶の湯、墨絵の体験学習。
	理科	大地のつくりと変化	常設展示室の地質コーナーの見学と収蔵資料の岩石標本の観察、市内の化石林公園などを見学する。

## (2) アンケートの概要

文化の森は、2005年度から3学期に美濃加茂市内の市立の全小学校6年生を対象とした「文化の森 小学6年生アンケート」を実施している。本アンケートはA4用紙両面印刷の1枚、項目は大項目を5つ設定した。アンケートの回答対象者は小学6年生の3学期に在学している子どもで、個別に無記名での回答である（ただし学校名のみ記載）。3学期に実施することは、小学校生活を振り返りながらこれまでの自分の成長を確認する意義のある時期と考えたためである。また、今回事例として取り上げる文化の森で実施したアンケートは、1回の学習についての調査ではなく、小学校6年間の多感な時期に経験した長期間に渡る学習活動の経験についての調査である点にも注目したい。アンケートは各学校に1名ずついる「文化の森活用委員」の教師を窓口し、配布・回収に協力をいただいた。ただし、実施方法（欠席者の扱い、教室での回答か宿題としたか）等については各校の事情に任せており、回答時間などは不明である。なお、2006年度のアンケート調査期間は、2007年2月9日から2月28日まで、有効回答数は回収された回答全ての515点、回答率は98.7パーセント（2007年3月1日在籍児童数522名で算出）であった。

2006年度分のアンケートは、以下の5項目で実施、実際のアンケート用紙は次頁の通りである。

項目1 みなさんは、小学校の6年間に下記の学習を文化の森で行いました。印象に残っている学習を3つ選んで、○をつけてください。

項目2 次のことがあったら○をつけ、その時のことをもう少し詳しく書いてください。

- ・文化の森で学習したことを、家族に話したことがある。
- ・文化の森に、遊びに行ったことがある。
- ・学校の授業以外で確認したいことがあり、文化の森へ行ったり、文化の森の人に質問したり、話を聞きに行ったことがある。
- ・文化の森で聞いたことや調べたことを、夏休みの研究などにいかしたことがある。
- ・化石林公園やささゆりクリーンパークなどでの学習の後、もう一度家族などでそこを訪れたことがある。
- ・文化の森での学習をきっかけとして、他の博物館や美術館に出かけたことがある。
- ・文化の森のホームページを見たことがある。

項目3 文化の森で学習したことにより、自分にどんな力がついたと思いますか。

項目4 文化の森ではこんな勉強もできるだろう、こんな勉強をしたいな、こういうことをすると学校の勉強がよく分かるなど思うことがありましたら、その理由もあわせて書いてください。

項目5 文化の森に、一言どうぞ。

なお、項目1については、1年時から6年時までの教科と単元名あるいは簡単な学習内容を表の形に現し、その中から選択するようになっている。また、選択した各活動について、選択した理由や印象に残っていることなどを自由に記述できるよう欄を設けている。しかし、小学校ごと



---

に学習活動内容が異なっているため、実際のアンケート用紙は、学校毎に項目1が異なる。各学校の項目1の内容については、「表1 アンケート項目1の結果」にある。

### (3) アンケート項目と視点の関連

それぞれのアンケート項目から得られる回答と3つの視点には重複し合う部分がある。特に各項目の中で子どもの回答から得られると考える視点との関係を以下で述べる。

項目1については、文化の森での学習内容について問う。この項目は、教科学習での学びの振り返りという要素が強く、視点a「知識・技術」との関連が深い。項目2は、学校の授業日に文化の森を訪れた以外の来館状況についての設問であり、この項目は特に視点c「行動の広がり・発展」と関わりがある。項目3は、文化の森での学習を通じてついたと思われる力について尋ねている。例では、土器拾いなどの歴史体験学習から社会科への興味関心の高まりについて挙げているが、教科に関わってついた力とは限らない。子ども自身が「ついた」と感じた力を自己評価する項目である。そのため、視点a「知識・技術」、視点b「心・感性」と関わりがある。項目4は視点b「心・感性」と関わりがある。文化の森での学習への期待を汲み取ること、そして文化の森と学習を結びつけて考えさせること、子どもの興味関心を見い出すことを意図した項目である。項目5はすべての視点と関わりがある。

### (4) アンケート項目と自己評価の側面

このアンケート調査を子どもの「博物館と関わった学習についての振り返り」という側面から見ると、自己評価のための内容も含んでいることが望ましいことは先にも触れた。梶田は自己評価の5つの側面を、「授業・活動への参加状況」、「向上・成長の状況」、「学習に関する習慣・態度」、「対人関係のあり方」、「自分自身の全体的あり方」としている（梶田 2002 pp.188-192）。今回設定した項目の中でも、この5つの側面について触れることができる。項目1では「授業・活動への参加状況」について、項目2では、「学習に関する習慣・態度」や「対人関係のあり方」について、項目3では「向上・成長の状況」についてということが考えられる。項目4は、これまでの学習経験を総合した上で考える必要があるが、「授業・活動への参加状況」や「学習に関する習慣・態度」が関わってくると言える。項目5は文化の森へのメッセージであるが「自分自身の全体的あり方」とも関連した記述ができるものとする。

### (5) アンケートによる調査の問題点

以上のようなアンケートによる調査の問題点としては、以下の点が考えられる。

第1点目は正確さである。子ども自身の言葉で回答する記述式のため語彙や表現力といった点で十分でない場合も考えられる。第2点目は判断の同一性の問題である。調査の評価の視点を定めたことにより、結果を見る「ものさし」が定まった。しかし、数値的な判断によりなされるものでないため、客観性や判読者により読み取り方に差異が出てくる可能性があることは否めない。第3点目は6年間の学習活動を振り返るため、子どもの記憶としては曖昧な場合が多く、ま

# 文化の森 学習アンケート(6年生)

蜂屋小学校



みなさんはもうすぐ中学生ですね。1年生の時から文化の森で勉強したことのあるみなさんに質問です。これまでの学習を振り返り、正直に答えてください。

1. みなさんは、小学校の6年間に下記の学習を文化の森で行いました。印象に残っている学習を3つ選んで、○をつけてください。

学 年	学 習 活 動 内 容	○をつける
1年	5/31 『かんない・せいかつたいけんかん見学』	
	12/13 『リース作り』	
2年	5/8 生活 『森の中でこん虫さいしゅう』	
	1/21 総合 『かみすき体けん』	
3年	5/7 社会 『わたしたちのまちみんなのまち』 理科 『チョウをそだてよう』	
	2/5 社会 『くらしを守る』	
4年	5/27、9/7、12/16 社会 『住みよいくらしをささえる』	
	2/10 社会 『昔のくらし』	
	3/2 総合 『紙すき体験』	
5年	9/14 社会 『自動車をつくる工業』 理科 『流れる水のはたらき』	
	11/17 総合 『美濃加茂市の福祉』	
	2/8 総合 『地域のお年寄りの方とふれあおう』	
6年	10/6 理科 『大地のつくりと変化』	

選んだ3つについて、活動を通して分かったこと、気づいたこと、発見したこと、もっと知りたかったこと、学習の時のエピソードなどについて、できるだけ詳しく書いてください。  
※どの学習のことか分かるようにしてください。



/	
/	
/	

裏にも続きます。

2. 次のことがあったら○をつけてください。
- ・文化の森で学習したことを、家族に話したことがある。
  - ・文化の森に、遊びに行ったことがある。
  - ・学校の授業以外で確認したいことがあり、文化の森へ行ったり、文化の森の人に質問したり、話を聞きに行ったことがある。
  - ・文化の森で聞いたことや調べたことを、夏休みの研究などにいかしたことがある。
  - ・化石林公園やささゆりクリーンパークなどでの学習の後、もう一度家族などでそこを訪れたことがある。
  - ・文化の森での学習をきっかけとして、他の博物館や美術館に出かけたことがある。
  - ・文化の森のホームページを見たことがある。

その時のことをもうすこしくわしく書いてください。

---



---



---



---



---

3. 文化の森で学習したことにより、自分にどんな力がついたと思いますか。  
 (例えば、文化の森で土器拾いなどの歴史の勉強をして、社会の授業が楽しくなった。)

---



---



---

4. 文化の森ではこんな勉強もできるだろう、こんな勉強をしたいな、こういうことをすると学校の勉強がよく分かるなど思うことがありましたら、その理由もあわせて書いてください。  
 (例えば、文化の森の施設を使って環境を守る工夫みつけの学習)

---



---



---

5. 文化の森に、一言どうぞ。

---



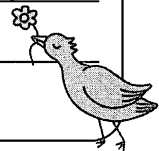
---



---



---



ご協力ありがとうございました。中学生になっても、文化の森に来てくださいね。

---

た3学期という多忙な時期に調査の時間をとることが大変ということである。今後も学校と相談・調整をしながら実施していく必要がある。

## 5. 2006年度「小学6年生アンケート」の分析<sup>3</sup>

以下、先に挙げた3つの視点と関連づけながら項目ごとにアンケートの結果を考察していく。なお子どもの記述からの引用は原則そのまま、明らかな誤字については訂正している。また、学校名の後にある英字は先に提示した3つの視点を指している。

### (1) アンケート項目1 (a 知識・技術)

項目1については、1年時から6年時までの学習内容から印象に残っている学習活動を3つ選択し、それぞれ選んだ理由を記述してもらった。なお、全小学校の学習内容は、次頁の「表1 アンケート項目1の結果」にある。

1年生から3年生までの学習活動について印象深く残っていると記述を読むと、何か物を作り持ち帰る、あるいは森の中で体を動かし何かを作るといった活動、すなわち五感（触、臭、目、耳、味）を働かせた学習活動に集中している。例えば、染め物の学習では「マリーゴールドなどで、黄色にそまるということが分かりました。」（山手3年時[総合・布を染めてみよう]a）や「ビー玉とかを布で包んで染めると、そのビー玉をとめていた輪ゴムの所は色つかないということが分かった。」（山手3年時[総合・布を染めてみよう]a）、「パンをつくる時、竹でパンをつくるなんて思っていなかったのでびっくりした。私はパンをやくときがおもしろかった。味は、竹の味がしてにがかったけど、あったかくておいしかった。」（加茂野2年時[親子活動・竹パン作り、フィールドビンゴ]a）などである。また制作の活動を通じて、新たな気づきをした例もある。例えば「大根でっぼうやべらべらぶえが今の子供は全然やらないから今のおじいちゃんおばあちゃんがなくなったらしている人が少なくなると分かった。」（古井小3年時[総合・むかしの遊び道具作り]a c）というようにまとめている。

一方、高学年ではとりわけ5年時の縄文土器作り、6年時の化石レプリカ作りなどに代表される「ものを作る活動」に意見が集中していることが特徴的である。学年が上がるにつれて社会科や理科などの教科の学習に移行し、「勉強」の意味合いが強くなる。さらに博物館資料を教材として利用した授業や、学芸員が授業に関わる時間が増えてくる。そこで以下では、4年生以上が行う学習活動の中で、常設展示と企画展示、博物館資料を教材として利用し、学芸員が関わる授業を取り上げて、3つの視点と関連させながら概観する。

表1 アンケート項目1の結果 学校毎の活動内容と選択数について

太田小 全回答数 72			伊深小 全回答数 13		
学年	学習活動内容	選択数	学年	学習活動内容	選択数
1年	6/22『タワーからかんさつ』	16	1年	11/6『あきのおもちづくり』	2
	10/3『どんぐりひろい』	6	2年	10/31園工『リースづくり』	4
	12/7『でんしようあそび』『やきいも』	4	3年	7/4社会『わたしたちのまちみんなのまち』	1
2年	10/29生活『秋のあそびどく作り』	3		理科『チョウをそだてよう』	1
	1/31生活『紙すき体けん』『かんない見学』	29	3/4総合『むかしの遊び体験』 社会『火事がおきたら』	6	
3年	6/5園工『けずってあそぶ』『ちようこく作品めぐり』	12	4年	6/10社会『ごみのしまつと利用』	1
	社会『わたしたちのまち みんなのまち』	12	11/10社会・総合『きょう土を開く』	1	
4年	11/11社会『昔の人々のくらし』	14	2/9社会『昔のくらし』	3	
	2/24道徳『坪内逍遙展』見学』	6	5年	12/9総合『知恵を引きつぐ』	10
5年	7/1総合『昔の生活を知ろう』	45	6年	5/19社会『米づくりのむらから古墳のくにへ』	4
	11/15総合『長生きすてき』	15	10/13理科『大地のつくりと変化』	6	
6年	5/10社会『米づくりのむらから古墳のくにへ』	61			

古井小 全回答数 96			三和小 全回答数 7		
学年	学習活動内容	選択数	学年	学習活動内容	選択数
1年	10/16『どんぐりひろい』	4	1年	6/15『森の中でこんちゅうさしゅう』	0
	1/18『むかしのおもちづくり』	9		11/13『森のすみかづくり』	1
	11/27『秋のかかざり・おきもの作り』『かんない見学』	14	2/14『クラフトづくり(ほいくえんじへのプレゼント)』	0	
2年	4/16遠足	3	2年	5/16生活『かんない見学』	0
	9/18総合『むかしの遊び道具作り』	68	11/1総合『紙すき体けん』	0	
4年	6/2社会『住みよいくらしをささえる』	4	3年	1/15社会『昔のくらし』	1
5年	1/18、19総合『木の葉のお皿作り』	86	4年	6/29総合『そめ物をしてみよう』	4
6年	10/11理科『大地のつくりと変化』	86	5年	11/24総合『ごへいもち作り』	5
			6年	4/18社会『米づくりのむらから古墳のくにへ』	1

山之上小 全回答数 28			下米田小 全回答数 55		
学年	学習活動内容	選択数	学年	学習活動内容	選択数
1年	1/24『たごづくり』	15	1年	6/19『森のファッションショー』『フィールドビンゴ』	15
2年	9/12生活『でんしようあそび』『おもち作り』	4	2年		
3年	9/11園工・音楽『自分のリズムで楽きを作り、音楽を楽しもう』	9	3年	5/29社会『わたしたちのまち みんなのまち』理科『チョウをそだてよう』	12
4年	6/3社会『住みよいくらしをささえる』	0		7/3社会『わたしたちのまち みんなのまち』『たてもがあつまるどころ』	0
5年	1/20園工『木の葉のお皿作り』	23		9/17社会『ひとのくらしとわたしたちのくらし 園工『光のプレゼント』	5
	5/17社会『米づくりのむらから古墳のくにへ』	17		2/4社会『火事がおきたら』	0
6年	10/4理科『大地のつくりと変化』	14	4年	7/7社会『ごみのしまつと利用』	2

蜂屋小 全回答数 43			山手小 全回答数 78		
学年	学習活動内容	選択数	学年	学習活動内容	選択数
1年	5/31『かんないいせいかつたいけんかん見学』	0	1年	5/8、6/21、7/4『かんない見学』	1
	12/13『リース作り』	12		11/15『あきのおめん・かんむりづくり』	1
2年	5/8生活『森の中でこんちゅうさしゅう』	3		2/20『たぬきの系車』	7
	1/21総合『かみすき体けん』	3	2年	5/29園工『しぜんのかざりようをつかかってじゆうにならべる』	2
3年	5/7社会『わたしたちのまちみんなのまち』理科『チョウをそだてよう』	0		10/10生活『あきのかざりものづくり』	1
	2/5社会『くらしを守る』	0	3年	7/1総合『かいこをそだててみよう』 社会『みのか市のように』	10
4年	5/27、9/7、12/16社会『住みよいくらしをささえる』	0		12/4、12/9総合『布をそめてみよう』	37
	2/10社会『昔のくらし』	24	4年	10/20社会『きょう土をひらく』	0
5年	3/2総合『紙すき体験』	13	5年	2/3総合『縄文土器作り』	68
	9/14社会『自動車をつくる工業』理科『流れる水のはたらき』	12	6年	4/19社会『米づくりのむらから古墳のくにへ』	13
6年	11/17総合『美濃加茂市の福祉』	11		6/13社会『源頼朝と鎌倉幕府』	67
	2/8『地域のお年寄りの方とふれあおう』	24	5/10社会『米づくりのむらから古墳のくにへ』	27	

加茂野小 全回答数 123		
学年	学習活動内容	選択数
1年	7/3『もりのすみかづくり』	24
	11/28『リースづくり』	48
2年	11/15親子活動『竹パン作り』『フィールドビンゴ』	81
3年		
4年	10/6社会『きょう土を開く』	5
5年	1/26、27総合『縄文土器作り』	115
6年	12/5理科『大地のつくりと変化』	90

(表中の「総合」は総合的な学習の時間を指す)

### ① 6年時の社会科と企画展「土に残る記憶展」との関連について

本展覧会は6年時の社会科・歴史学習の導入に合わせて、文化の森で毎年開催しているものである。学習活動としては、展覧会の見学とともに常設展示の考古関連コーナーの見学や縄文土器作り、遺跡の上に建設された文化の森の立地条件を活かした出土品さがしや発掘の整理作業の様子の見学などを組み合わせている。この学習に対して、子どもは「美濃加茂にも古墳があったということが分かりました。」(山手小a)や「たて穴じゅうきよを初めて見て、びっくりした。だいぶ広いということが分かった。」(山手小a)、「社会の勉強で、教科書にのっていたけど実物を見たことがないから、はにわや土器にあんなに種類があるとは思わなくて、昔のものがそのままの形で残っていたからすごいと思った。」(太田小a)という感想を抱いている。教科書中の記述や内容を身近な存在におきかえ捉えなおすことができている。またこの学習を通じて土器や古墳に興味を持ち、文化の森の夏休みの講座に参加しながら夏の研究に取り組むという学習の広がりを見せた子どももいた。

### ② 6年時の理科「大地のつくりと変化」の学習について

次に、6年時の理科と常設展示室、化石林公園との関連についてである。この学習では常設展示の地質関係のコーナーと化石林公園の見学、岩石標本観察、レプリカの作成などを組み合わせている。ここでは、見学の際に学芸員が地域の大地の形成について、そして化石などから当時の様子を知ることができることについて説明を行う。「化石林公園は、何回か行った事があるけど、そこに化石が今もあるというのは知らなかったので、すごいと思った。」(伊深小a)と言うように、学芸員が授業の中で解説を行うことで初めて得る知識があることが分かる。「いろんな所にたくさんあって地層はつながっているとはじめて知りました。みぢかにたくさん地層があるんだあとと思いました。」(蜂屋小a c)、「いままで文化の森で見てきたのとはちがひ、(ちそうが)びっくりするほど大きいことを感じました。」(伊深小a)という驚きも同時に抱いている。しかしこの授業を経験した子どもの多くが、「レプリカ作りで失敗せずにできた。」(加茂野小a)や「化石のレプリカを作るのに、しんちょうにやらなきゃいけないので、ちょっとむずかしかった。」(山手小a)など、レプリカを上手に作るができるかどうか意識が集中してしまっている。本来レプリカ作りでは、作る過程の中で化石への関心を持つことや、博物館の展示にも使われるレプリカの意味を知るということをねらい学習活動に組み入れている。にもかかわらず、このように記述する子どもが多いことから、この活動ではねらいが達成できていなかったと言える。

### ③ 4年時の社会科「郷土を開く 太郎洞池の学習」について

文化の森に隣接する「太郎洞池」の歴史や当時の人々のくらしや思いについて、堤防づくりに使ったもっこなどの体験と道具の説明、学芸員による博物館資料の解説、池と水神を見て歩く学習を通して学習する活動である。授業時には子どもが元気に堤防作りをしたり、池に関する様々な質問が寄せられたり、池の大きさなどに感動する声が上がられたりして、学習の終わりには当

時のことがよく分かったという感想も寄せられる。美濃加茂市社会科副読本『わたしたちのまち 美濃加茂』にも掲載され、授業と直結していて、当然事前・事後の学習との関連も深く子どもの中に長く残る学習と考えていた。しかし、意外にどの学校においても「印象に残った学習」としての反応は少なく、「太郎洞池を見てまわったり、太郎八のことがよくわかった。」(加茂野小 a)に見られるような表面的な記述が多い。1つひとつの活動の意味の認識と時間的なゆとり、学習したことをまとめた上でもう一度ため池とそれを作った人々の気持ちなどに振り返る事後の学習が必要と考える。

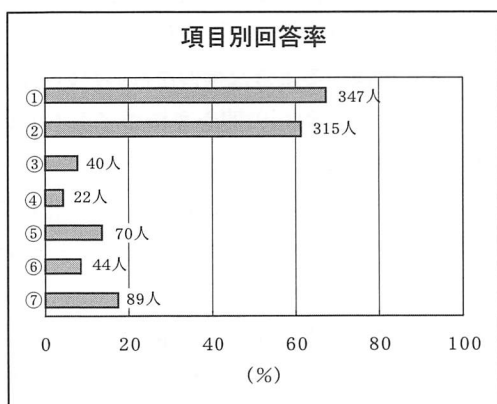
## (2) アンケート項目 2 について (c 行動の広がり・発展)

6 割を超える子どもが文化の森での学習活動が家庭で話題となると答えている。特に、何かを作って持ち帰った場合には、それを見せながら楽しかったことや見たことを話していることが分かった。文化の森が校区内の子どもは自力で来館できるが、校区外の子どもは家族の理解と協力がないと来館できない。「文化の森はすごく楽しかったからお母さんに話したら家族でいこうということになった。」(加茂野小 b c) のように、子ども自身の強い気持ちが家族とともに再来館につながる。その他に、文化の森が夏休みの科学作品・社会科作品展や子ども展の会場になることもありこの時期の来館が多い。

学習活動で知り合った学芸員に質問にくる子どもは 1 割にも満たないが、来館した子どもからは「美濃加茂市の歴史について調べた時に文化の森の人が分かりやすく教えてくれました。」(古井小 b) という声が寄せられている。美濃加茂市の近隣には 6 年時の授業と関わる様々な博物館がある。数は少ないが学習活動が終わってから、「関の博物館へ行っていろいろな化石を見た。」(山之上小 c) に見られるように岐阜県博物館やサイエンスワールド、瑞浪市化石博物館などへも出かけることがある。文化の森のホームページは、学校の授業の中で利用されていることが分

表 2 アンケート項目 2 の結果

- 項目①文化の森で学習したことを、家族に話したことがある。
- 項目②文化の森に、遊びに行ったことがある。
- 項目③学校の授業以外で確認したいことがあり、文化の森へ行ったり、文化の森の人に質問したり、話を聞きに行ったことがある。
- 項目④文化の森で聞いたことや調べたことを、夏休みの研究などにいかしたことがある。
- 項目⑤化石林公園やささゆりクリーンパークなどでの学習の後、もう一度家族などでそこを訪れたことがある。
- 項目⑥文化の森での学習をきっかけとして、他の博物館や美術館に出かけたことがある。
- 項目⑦文化の森のホームページを見たことがある。



かった。

### (3) アンケート項目 3 (a 知識・技術 b 心・感性)

自分にどんな力がついたかについて、ほとんどの子どもが「教科の授業が楽しくなった、興味を持った。」という意見を持っている。例えば、「理科の授業が楽しくなった。」(下米田小 a)、「土器をつくったのがたのしかったので、社会の授業がたのしくなった。」(下米田小 a)、「縄文土器や、化石(にせもの)を作ってすごく楽しくなって家に帰って教科書や本などをたくさん読んだ。」(加茂野小 c) という記述が見られる。学校の授業という形態での来館のため、教科の知識や技術についての記述が多くなることは否めない。しかしその中でも「勉強になる資料や実際のものを見せてもらえるので、いろいろなことが分かる。」(伊深小 a b)、「写真だけじゃなくって近くで見ることができて楽しかったから、歴史のことが少し好きになった。」(伊深小 a b) という記述からは、教科の知識や技術、興味を得るだけでなく、文化の森を間近で見ることのできる実物資料のある博物館として捉えたと考えられる。

### (4) アンケート項目 4 (b 心・感性)

この項目では、6年間の学習活動を踏まえ、子どもの「文化の森観」や期待をうかがうことができる。

子どもが期待する学習活動は大きく分けて「自然(緑、木の利用)について」、「環境(地球温暖化、保護)」、「工作(図工)」の3つがあった。

その他に、標本の作り方や観察、戦国時代の人物について、農民の暮らし、科学的なものの展示、歴史人物についての学習がしたいという期待を寄せている。「戦国時代の農民の暮らし体験。理由は、戦国時代の差別によって農民の暮らしはつらかったといわれるだけではたのしくないで、農民が食べていた雑こくやあわなどのし食」(山手小 b) など、実際に経験することが「分かる」ことにつながるとその大切さを子ども自身も認識し、それが文化の森ならば可能ではないかと考えていると言える。また独自の発想で「算数の測量を行う」ことや、化石や岩石、遺跡についてさらに深めるような学習を行いたいという記述もある。

ボランティア活動への関心を持つ子どももいる。「おじいさん、おばあさんたちとふれあい、ボランティアでなにができるか、考えることができる。理由は1人ぐらしの人でも楽しむことができるからです。」(三和小 b c) や、「文化の森で環境をテーマにした、ボランティア活動をする(ことができそうだ。)」(下米田小 b c) などの活動を挙げている。

### (5) アンケート項目 5 (a 知識・技術 b 心・感性 c 行動の広がり・発展)

ここでは様々なことが書かれているが、美濃加茂市だけでなく外へ目を向けて文化の森を捉える子どもや「公共施設」として捉えることができる子どもがいる。「私は、美濃加茂市に『文化の森』という施設があることがとてもうれしいです。他の市にはないし、学校で学習した以上の



---

ことが分かるのでとてもいい施設だなあと感じました。これからも学習に利用していきたいと思っています。これからもがんばって下さい。」(古井小b c)や「文化の森は市民、誰もが自由に学習できて、施設も豊富で不自由な方でも利用できて、市民が喜ぶ所だと思います。」(蜂屋小b c)、「文化の森はおとしよりのためのバリアフリーなどトイレのことなどみんながつかえてべんりでもっと文化の森のことをしりたい。」(蜂屋小b c)などである。このような気づきがあるが、この福祉体験の学習を「印象に残った学習」として選択した子どもは10名程度であったことにも着目したい。

中学生になった自分の姿と結び付けて、「文化の森はいろいろ体験できるし、学習も楽しくできるので中学生になってもいってみたいです。」(下米田小b c)「中学生になっても調べたいことがあったら行きたいと思います。」(下米田小b c)と考える子どもも多くいる。

文化の森のことを身近に感じて「つながり」を持っていることとして、今回のアンケートの中からいくつかの記述を挙げておきたい。そこからは、文化の森での子どもの学習体験を大切にしようとする家族の姿も同時に伺うことができる。「文化の森でひろったどんぐりは、今僕の家で小さな木になっています。その木を見ると1年生の時を思い出します。」(古井小1年時b c)、「秋のかべかざりを私は作りました。木の枝や、まつぼっくりなどを拾ってきて、板にホットボンドで付けたことを覚えています。その時に作ったかべかざりの真ん中に運動会の写真をはって、今でも家のげんかんにかざってあります。」(古井小2年時b c)などである。

ところで、文化の森での子どもたちの学習活動には、学芸員、学習係、学習支援ボランティアをはじめとする文化の森ボランティアなど多くの人に関わっている。この人々との交流から得られる喜びや知恵の伝授、感謝の気持ちについても具体的に表現している。例えば、「1年のころなので、くわしく覚えてはいないけれど、私は『お手玉』をつくりました。針と糸に慣れなくて、不安だったけれど、その時、来て下さっていたおばさんたちに教えてもらいながらやったような気がします。」(古井小1年時c)といった記述がみられた。

## 6. アンケート分析から見る学校の博物館利用

### (1) 子どもの学び

今回のアンケートにより、子どもが学校の博物館機能を利用した学習活動により学んだと確信が得られた3点を以下に挙げる。まず1つ目は、「博物館教育の中心は、まさに、この『展示』にある。……『本物(実物)を見せ、あるいは触れさせて、感じさせ、発見させ、考えさせること』は、いわば教育の原点」(倉田ほか 1997 pp.252-253)であるという、博物館での教育活動の特色を子どもが経験から知ることができた点である。子どもの言葉からも、博物館での学習は「本物」の土器や岩石の標本など「勉強になる資料や実際のものを見ることができ」こと、実物を見ることで教科書での学習だけでは分からない、実際の空間的な感覚、質感などを把握できることが学ばれていると言える。次に、教科への興味づけや苦手意識の克服の契機となったことである。教科書を読みながら学ぶだけではなく、実際に身体を動かしてつくり出したり、行っ

---

たことのある場所でも教科の「目」で見たりすることで、これまでとは異なった見方ができ、「楽しかった。」「面白かった。」「またやってみたい。」という感情を抱くに至ったと考えられる。3点目に、学習に関わる学芸員や学習係、文化の森での学習活動の特色でもあるボランティアの関わりも大きな影響を与えていると言える。2005年度のアンケートでは「私も大人になったら、文化の森でボランティアしてみたいです。」といった記述が見られた。また、2007年度に職業体験学習にきた中学2年生のある生徒は、学習の手伝いに来てくれるボランティアの数の多さに驚くと共に、お金をもらわずにボランティアに来る理由が分かったと反省の中で綴っている。このように博物館にある実物資料からだけでなく、「児童・生徒にとっては、……博物館で生き生きと活動されているボランティアの姿から、学校内だけでは得られにくい“人”の生きがいといったものを感じることができ」（大堀哲ほか 1997 pp.191）ることも分かる。

一方、先にも少し触れたようにアンケート結果から印象に残っている活動が必ずしも子どもの博物館活動への認識や理解、考え方や見方に影響を与えるとは限らないことも分かった。そして、学校の授業の中での学びから、これから先も「自分のための学び」を行う場所という意識を持つに至ったかどうかという点についてはもう少し長期の調査が必要であると感じた。

## (2) 学習活動に関わる人のこと

子どもは「勉強になる資料や実際のものを見せてもらえるので、いろいろなことが分かる。」と博物館での学習を振り返っているが、私たちは、博物館として「真に児童に伝えたいこと」を伝えてきたのだろうかという疑問も残る。今一度、文化の森が博物館であることを意識し、授業のあり方、「博物館と学校の連携」に向けて見直す点を挙げる。まず1つ目に、博物館での学習であるという点から内容と時間の見直しが必要である。開館前に作られた『文化の森活用の手引き』では、「文化の森だからこそ、できる学習という観点で各学年の単元を選定し」（美濃加茂市教育センター 2000 pp.4）た活動計画が掲載されている。今、文化の森でできる学習活動内容はこの頃と比べると随分幅広くなってきている。充実してきてはいるが、先に触れたような授業時の子どもの様子とアンケートの反応から、子どもに伝えたい内容が十分に伝えることが出来ていないと感じられた。それは1回の学習活動に色々な活動が組み込まれているため、そして以下に挙げている点とも関連しているためと考えられる。2つ目には、文化の森での学習の意図を学校へしっかり伝える場の必要性が挙げられる。学校、教師に博物館としての側面を理解してもらう機会が大切である。教員研修の機会の設定や文化の森活用委員会の活動を学習内容に活かすことである。3つ目に学習に関わる教師、学芸員、ボランティア、学習係がねらいやどのような活動を期待しているのかを改めてしっかり確認し、また活動当日の教師の積極的な関わりを促して行きたい。そして、それぞれの立場でしっかりと子どもに関わることが必要である。4つ目に、事前・事後学習とのつながりの重要性が挙げられる。学習が一過性の学習活動で終わらないためにも、そして文化の森での学習を必要とする部分に、より焦点化するためにも大切なことである。これらは先のアンケート項目1の記述内容から感じたことである。

---

学校が博物館機能を利用して行われる学習活動は、学校の授業の中で必要とする知識を得ようとする側面が強いことは確かである。しかし、博物館が独自に視点を定めてその学習活動を意味づけ・価値付けることで、「博物館ならではの学習活動」となっているか、博物館の機能を十分利用する学習活動になっているかが明確になると言える。

## 7. おわりに

本稿では、はじめに博物館での学習活動を通じて「子どもたちが博物館に滞在し、学習する中でどのようなことを学んだのか」を評価する際の分析の視点について検討を行った。これにより博物館での学習活動を振り返る視点が定まったといえる。この視点をもとに、文化の森における学習活動のアンケートを分析することで、小学校6年間の博物館機能を活用した学習活動での子どもの学びと、より充実した学習のために学校と博物館など関わる人々が立ち返る点を示すことができた。

中学という近い将来については、博物館とこれからも関係していきたいと考えていることが分かる。しかし6年間という短期間での学習と子どもの経験を元にしたアンケートの分析であるために、中学以降、子どもたちが進学や職業選択の場面に行き着いたときに博物館経験がどのように働くのか、どのように関わっていく可能性があるのか、あるいは将来親となった場合その子どもに対してどのような博物館経験をさせることになるのか、といった長期的な博物館体験の効果や関わりについては検証できていない。段階的・長期的な調査研究をもとに、今後も子どもと博物館との関わりを見ていきたいと考える。

## (引用文献)

- 廣瀬隆人 2006年 「美術館教育をめぐる」 NORTHERN OWLS 2006.12 (vol.16) 北海道美術館学芸員研究協議会
- 井上由佳 2006年 「歴史系博物館における子どもの学びの評価：事前・事後評価を中心に」 『博物館学雑誌』第31号第2号(通巻44号) 全日本博物館学会
- 梶田叡一 2002年 『教育評価』第2版補訂版 有斐閣
- 倉田公裕・矢島國雄著 1997年 『新編 博物館学』 東京堂出版
- 松岡葉月 2006年 「J. デューイと博物館の学びの評価—歴史展示における主体的学びの視点—」 『博物館学雑誌』第32巻第1号(通巻45号) 全日本博物館学会
- 美濃加茂市教育センター 2000年 『みのかも文化の森活用の手引き 平成12年度版』
- 大堀哲編著 1997年 『教師のための博物館の効果的利用法』 東京堂出版
- 竹内有理 2006年 「博物館における学習とその評価をめぐる」 『歴史地理教育』 2006年2月号 (No.695) 歴史教育者協議会編
- 湯浅万紀子 2003年 「博物館体験を評価する視点—博物館活動の長期的影響力を調査する—」 『日本ミュージアムマネジメント学会研究紀要』第7号 日本ミュージアムマネジメント

---

学会

(注)

- 1 「化石林公園」とは、美濃加茂市南部の木曾川沿いにある国定公園である。常設展示室の化石や岩石など展示資料と関係があり、「珪化木」が400本以上見つかった場所である。同時に地域の大地や地形を形成する地層も観察することができる。
- 2 みのかも文化の森における「博物館と学校の連携」による学習活動の詳細については、下記の拙稿を参照願いたい。  
西尾円 2002年「博物館と学校の連携 ミュージアムー『みのかも文化の森』での実践を通じて」『博物館学雑誌』第28巻1号（通巻37号） 全日本博物館学会  
西尾円 2007年「つながる文化の森のネットワーク」『月刊社会教育』No.625 国土社
- 3 本アンケート考察の全体については、『みのかも文化の森 活用実践集 ダイジェスト版（平成18年度版）』（みのかも文化の森 2007年）の21頁から27頁を参照されたい。なお、本稿では、このアンケート分析の一部を抜粋、加筆、再構成している。